

＝ 春・治・華（はる・はる・はる） ＝

3月14日(土)、ホワイトデーに合わせたかのように、東京・靖国神社にある桜の標本木(ソメイヨシノ)が開花した。統計開始以来、最も早い開花日となり各地域の開花の便りも届き春本番を迎えた。例年であれば、あちらこちらで賑わうお花見も新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、花見の宴をはじめ、多くのイベントが自粛を余儀なくされている。

感染経路がはっきりしない患者が増える流行期のフェーズに入ったといわれてから数週間、学校の休校、テレワーク、外出の自粛など生活にも大きな負担が強いられている。いつまで続くのか予想もできない状況に、普段の生活をどのくらい制限すればいいのか、思うにまかせない日々が続いている。

そんな中、厳しい旅立ちを迎えた仲間たちの組合解散大会に出席してきた。3月末で幕を閉じた日本鑄鍛鋼労働組合である。

主力の発電プラント部材が石炭火力の縮小基調や原子力設備の小型化で「競争力を発揮できず中長期の業績も厳しい」との判断で2020年3月末をめどに自主廃業をすると報じられたのが昨年5月。発電用タービンロータ軸をはじめ、船舶、鉄鋼、産業機械の心臓部に使用される大型鑄鍛鋼品を製造し、世界中の発電プラントに製品を納める鑄鍛鋼業界有数の企業であった同社、1970年の創業以来50年間にわたり培われてきた技能・技術を惜しむ声は多かった。

それを支えてきたのは、組合員・従業員の皆さんであり、社業の発展を信じ、生産、新技術の開発、営業業務に汗し、出向をはじめとする厳しい経営施策にも真摯に取り組んできたことを想えば、その胸の内は計り知れず心が痛む。ただ救いは、突然の倒産ではなく、苦渋の決断であったであろう経営判断のもとに、廃業時期を明示し労働諸条件のあり様や、雇用の確保に真摯な労使交渉を行えたことである。基幹労連中央本部の合理化対策委員会のもと、福岡県本部の懸命な支援をいただき一定の形が整ったが、何より、一従業員として皆と同じ立場にありながら、組合員の安心・安定の確保のために課題解決に奔走した労働組合執行部の皆さんに心から敬意を表したい。

今、群馬県本部加盟の組織でも同様の問題に追われている。県本部では、不安や動揺は安全に直結するとして、「まず安全」を経営に要請するとともに、安全ピラの配布によるモチベーション維持、そのもとで雇用確保に向けた支援を行っているとの報告も受けている。相手の立場に身を置き、自らの組織に置き換えて誠心誠意の対応を実践していることに感謝しかない。

足もと、新型コロナウイルスの感染拡大で、地域も業種も隔たりなく影響が広がっている。とりわけ、製造業では、操業停止や、生産縮小など、サプライチェーンへの影響が広がっており、体力の乏しい中小・零細企業は先行きが見通せず、倒産だけでなく廃業を促す契機にもあるという。安心・安定は雇用の確保がなくてはならず、時間との勝負でもある。政治主導で官民あげての実行力ある早急な対策を求めている。

凍解氷積(とうかいひょうしゃく)という四字熟語を見つけた。疑問や問題が氷がとけてなくなるように解決するという意。新型コロナウイルスへの対処は、今しばらくの時間と辛抱を要するだろうが、一方でテレワークやWEB会議をはじめとする新たな動きは、デジタル社会の進展速度を上げている。大変革期を迎える経済・社会のもとで、私たちの働く産業・企業も否応なく構造変化の中で生まれ変わる時期かもしれない。氷(難題)をとかし、次なる時代への挑戦でもある。

辛抱の「辛い」という漢字に横棒一本足せば「幸せ」となる。私たち(労働組合)の横棒は互いの手と手を結んで通すこと。まずは安全と健康で、真の春の時を待ち、感染の拡大を治め、新たな芽を育みながら次なる華を咲かせるために、我慢と努力で、この難局を乗り切ろう。

ご安全に

2020年4月1日

日本基幹産業労働組合連合会
中央執行委員長 神田 健一